

## 《聖書を耕す —聖書との新たな出会いのために—》

同志社大学 石川 立

2017.03.07(火)

於・同志社大学

日本聖書協会では新しい聖書の翻訳を進めておりますが、本日は、この聖書翻訳について、そもそも新しい翻訳がなぜ必要なのか、どのように進めているのか、進捗状況はどうか——そういったことを、お話しさせていただきたく思います。私はこのプロジェクトの翻訳者でもあり、また編集委員という立場でもありますので、外部者ではなく、内部の立場から、お話をさせていただこうと思います。

### I. 問題の提起:なぜ新しい翻訳を出すのか？

#### 👉なぜ新しい翻訳を出すのか？

聖書協会は新聖書翻訳についてきちっと発信しているのですが、聖書の新しい翻訳が出る、という情報が、噂の形で、少しずつ教会や教会関係者の間で広がっています。なかには、「えっ？ また新しい翻訳を出すんですか?!」と驚く方もいらっしゃる。「私はずっと、口語訳聖書に親しんできたんです。でも、ついこの前だと思うのですが、新共同訳聖書が出て、教会でも取り入れ、私もやっと慣れてきた——というのに、また新しい翻訳が出るんですか?!」と戸惑ったご様子です。

新しい聖書翻訳が準備されていると聞いたときに、「せっかく『新共同訳聖書』を読み慣れてきたのに、また新しい訳が出るのか」——このような嘆きというか、感想を持たれる方も少なくないことと思います。もったいな感覚だと思います。

ご年配の方は、「新共同訳は、つい最近出た」というふうに思っている方もいらっしゃるかもしれません。しかし、実は、新共同訳聖書が出てから、すでに30年も経っています。

「そうか、新共同訳は出版されて30年近くも経ったのか。やはりもう古臭くて、読むに耐えないのか」。

いえいえ、そういうわけでもありません。もちろん、海外のものも含めて、どんな聖書の訳でも完全、完璧というものはありませんから、新共同訳も完全ではありません。しかし、慌てて抜本的に修正しなければいけないような致命的な欠陥がある、というわけでもありません。新共同訳は立派な訳なのです。確かに「欠点」は持っていますけれども、それは他の聖書訳も同じです。まだなお、読むに耐えるもので、古臭くなってしまったわけではありません。

「なんだ、それなら、わざわざ苦勞して新しい訳を出さなくてもよいではないか」ということになるかもしれません。

しかし、新しい訳を出さないということも、これはこれでまた、問題です。新しい訳を30年も出さずに放っておきますと、「聖書協会も聖書学者も怠慢だ、何をしているんだ」とお叱りを受けてしまいます。

「聖書の翻訳というものは、ず〜っと長い間、大切にすべきで、頻繁に訳し直すようなものではない」と感じる一方で、「聖書学も、日進月歩、進歩しているはずなので、聖書も、何年か経ったらやはり、新しい訳を出したほうがいい」と思うのも、私たちの普通の感覚ではないでしょうか。

私たちの一般の感覚をもとに考えますと、新しい訳を出すべきか、出す必要がないのか、なかなか判断が付きません。

日本聖書協会は、新しい翻訳を企画しました。そして、現在は、もう、かなりのところまで作業が進んでいる段階にきています。しかし、私たちは改めてまた、問いたいような気もします。「一体どうして新しい訳を出すのでしょうか？」。

何も、白黒はっきり分けられるような、整然とした論理的な理由があるわけではないでしょう。

公けの見解としては、次のようなことが言われています。

1) 新しい訳を出す一つ目の理由は、新共同訳の出版から、ある程度の時間が経った、ということです。

過去の、聖書協会による日本語訳聖書の刊行を見ますと、『明治元訳』(1887年)、『大正改訳』(1917年)、『口語訳』(1955年)、『新共同訳』(1987年)と、ほぼ30年おきに改訂あるいは新訳が出されております。『新共同訳』の出版の30年後といえますと、2017年です。ですから、『新共同訳』後の新しい訳が、そろそろ欲しい時期に差し掛かっているわけです。

2) 新しい訳を出す二つ目の理由としては、聖書学、翻訳学など学問研究の進展があったということがあります。翻訳の底本となるテキストの改訂もなされました。日本語や日本社会の変化もありました。——このような様々な局面における、「聖書の言葉」をめぐる変化があったということです。

3) 新しい訳を出す三つ目の理由としては、『新共同訳聖書』見直しの要請があります。『新共同訳』に対しては次の点で評価が高いです。「カトリックとプロテスタントが共同で翻訳した一つの聖書を両教派で使用できるようになった」——このことへの評価が高いのですが、他方、欠点の指摘もあります。全巻にわたる訳語の不統一性、敬語表現に対する不満、訳文の精度のムラなどの指摘がなされてきました。これらの問題点を改善するためにも、新しい訳が必要となってきました。(渡部信「日本における聖書翻訳の歩み」(上智大学キリスト教文化研究所編『日本における聖書翻訳の歩み』2013年、所収)64頁)

しかし、新しい訳を出す理由は、以上の点だけではありません。今述べた理由よりももっと根本的なところで、実は、翻訳はあくまでも翻訳である以上、定期的に訳し直さなければならないものなのです。翻訳されたテキストは、譬えて言えば、畑のようなものです。人は最初は、畑として耕し、石や雑草などを取り除きます。しかし、次第に人は、そこを畑と思わず、石も雑草もない整った土地なので、そこを歩くようになります。いつの間にか、その畑は道になり、表面の土が固まってしまふ——そのような感じでしょうか。

多くの人たちが何度も何度も一つの聖書翻訳を読んでいますと、その翻訳の表面が踏まれ、踏まれて、滑るほどに固くなる。読み慣れてしまつて、さつと読めてしまうようになる。翻訳テキスト

という地面の下が実は大事なのに、どこか別のところへ行く通り道になってしまうのです。

新しく翻訳するという事は、その固くなってしまった地面を**耕すこと**です。

いくらすぐれた翻訳でも、そのまま放っておいてはいけない。たとえ優れた翻訳があったとしても、時間が経てば、必ず新しい翻訳を出さなければならないのです。定期的に耕さなければならない。

新しい聖書翻訳を出すということは、前の訳を否定することではありません。もちろん何らかの改善をしていくわけですが、前の訳を否定したり、超えたりするわけではありません。口語訳聖書が文語訳聖書を否定したのではない。新共同訳聖書が口語訳聖書を克服したわけでもないのです。

みんなが歩いて固くなってしまった、そして通り道のようになってしまった畑を、改めて畑として耕し、土をほぐし、柔らかくする——それが、新しく聖書を翻訳する、ということに他なりません。

## II. 聖書を耕す

### ☞「大嫌い」は「とても嫌い」の意味か？

「聖書の翻訳とは聖書を耕すことだ」——これが、この講演のテーマです。

このことをもう少し詳しくご説明いたします。

「翻訳」について「うんぬん」語る前に、まず、言葉の「意味」について一緒に考えてみたいと思います。

今しばらく、一緒に「文の意味」について考えていきますが、対象は、論文や新聞の社会面などの情報系の文章ではなく、小説や詩のような文学、および隠喩や象徴に満ちた宗教的な文書を対象に考えていきます。

私たちは一般に、言葉の中に意味が隠れていると考えているむきがあります。小説を読むと、その意味や内容は何かと探ろうとします。詩を読むことは少ないと思いますが、詩を読むと、意味がわからない、というように、「意味」を知ろうとして分からなくなります。テキストの中にカチツとした固まった意味があると思い、それを私たちは掘り出そうとします。

また、私たちは、一般に、言葉とその言葉が指し示すものとは、決まった関係で固定されていると考えています。「机」と言えば、机を指し、「講演」と言えば、今行われているような講演を表す。言葉とその言葉が指し示すものとは、しっかりと結びついていると考えます。ある言葉が何を指し示しているか、何を意味しているか、分からないときは、辞書を引きます。ある言葉の意味は、優れた権威ある辞書の中に書かれてある、というふうに考えます。

しかし、本当にそうでしょうか。

この例を見てください。

「**あんたなんか、大嫌い**」というセリフが小説の中に出てきたとします。

ここでの「嫌い」の意味は何でしょうか。辞書で調べてみますと、こうあります。

きらい【嫌い】

- ① きらうこと。忌みはばかること。「うそつきは一だ」「一な食べ物」
- ② (「…の一がある」「…する一がある」の形で) (好ましくない) 傾向。懸念。「凝り過ぎる一がある」
- ③ (「…の一なく」の形で) 区別。平治物語(金刀比羅本)「上下の一なく命の助かることを得ず」  
(広辞苑第5版)

しかし、「あんたなんか、大嫌い」というセリフの中の「嫌い」の意味は、この辞書にある意味とは違うのではないかと、思われます。むしろ、「嫌い」という意味ではなく、まったく逆の「大好きだ」という意味になることが多々あります。辞書にはない意味ですね。このような、辞書にない、特殊な意味は、このセリフが小説の中に埋め込まれてあるだけでは、出てきません。読者がいなければ… 読者がこのセリフを読まなければ、このような意味は出てこないのです。誰にも読まれなければ、このセリフは永遠に生きてこないのです。小説の中で、文字の中で、死んだままです。

もちろん、このセリフだけではその意味ははっきりしません。文脈がどうであるかによって意味はいろいろ変わってきます。しかし、基本的には、言葉の意味というものは、読者や受取り手がいなければ出てこない。生まれません。意味というものは、テキストと読者や受取り手との出会いによって、「生まれてくる」ものだと言えます。文脈というのは、言葉の意味を限定するというよりは、テキストと読者や受取り手とが出会いやすくする働きを持っていると言ったほうがいいのではないのでしょうか。

「あんたなんか、大嫌い」というセリフが或る小説に出てきたとします。これを小学一年生あたりが読めば、素直に、文字通り、「本当に嫌いなんだな」と理解するかもしれません。しかし、大人が読めば、これは大好きだということを表現していると理解できます。もちろん、大人でも、その理解の仕方は一様ではないでしょう。厳密に言えば、人それぞれ、このセリフの「嫌い」をどう理解するかは、異なってくるだろうと考えられます。テキストと読者とはどのように出会うのか、その出会い方によって、意味は変わり、理解は変わってくるのです。

テキストの意味は、テキストの中にあらかじめ入っているのではなく、テキストと読者との出会いによって生まれて来るものです。読者が変われば、出会いのあり方も変わり、理解も変わり、意味も変わります。また、同じ人が読むにしても、読むごとにテキストとの出会いは変わってきます。そして、その都度、新しい意味が生まれてくるのです。

聖書の中には、「あんたなんか、大嫌い」というセリフがあるわけではありませんが、他のセリフ、他の言葉ですけれども、このセリフと同じように、読者や受取り手との出会いを待ち、新しく生まれたがっている言葉が聖書には満ち満ちている、とすることができます。聖書の言葉は文字として死んだままにとどまりたがっているのではなく、読者や受取り手にに読まれ・聞かれ、その読者や受取り手の中で生きようとしています。

ですから、聖書を読む者は、読むごとに新たに聖書の言葉と出会い、読むごとに聖書の理解も異なってくる、と言えます。

ところが、聖書も読み慣れてしまいますと、一方では、読み慣れるということは勿論いいことなのですが、他方で、新鮮な出会いがなくなってしまう恐れもあります。テキストと出会う・言葉と出会うためには、横のほうに滑っていくのではなく——聖書を速読して全体の流れを掴む、という

ことも大事ですが——横に滑るのではなく、縦に読み込む、掘り込む、比喩的に言えば、テキストの上に立ち止まって、その下の固くなってしまった表面を耕す必要があるのです。固くなったテキストを耕して、改めて、意味の創出を待つ。そして、新しく立ち現れた意味を吟味する・味わい直す必要があるのです。

テキストを耕す必要がある。でも、翻訳されたものの上では、耕すのは不徹底にならざるをえません。翻訳されたものは表面が固い。翻訳されたものを耕す場合、他のいろいろな日本語訳、外国語訳などを参考にして耕すことにはなりますが、やはり、不十分です。十分に耕すためには、どうしても、原文に戻る必要があります。ここに、新しい翻訳の出番があります。原文に戻り、訳を検討しながら翻訳し直すことで、聖書を耕すわけです。踏みならされ固くなってしまった翻訳の表面の土を耕し、土に空気を入れ、土を柔らかくし、豊かな土壌にします。

ですから、聖書を新たに翻訳するという事は、聖書を耕すことなのです。耕された豊かな土壌からは、さまざまな植物が生え、いろいろな色の花を咲かせる可能性があります。読者や受取り手との出会いによって新たな聖書世界が広がります。新たに耕された翻訳テキストによって、読者・受取り手は聖書と新たに会うことができる、というわけです。

### Ⅲ. 新訳の目標、実際の作業から

#### ☞「恵みの業」か「義」か？

さて、聖書の翻訳は定期的にしていかなければならないのだということをご理解いただけたかと思えます。

それで、日本聖書協会では、新しい聖書の翻訳を企画することになりました。2010年から、新しい翻訳の作業を開始したわけです。

翻訳の作業で大事なことは、方針です。どんなプロジェクトでも方針、向かう目標は大事なのですが、翻訳の作業でも同じです。何の方針もなく、翻訳者を集めて、「さあ、とにかく、訳してください」と言うだけでは、聖書の翻訳は出発することはできません。方針、目標を決めなければなりません。

今回の翻訳事業は、このようなことを目標にいたしました。

「カトリックとプロテスタント教会の礼拝、礼典において教職者と信徒が、聖書を『信仰の書』として読むため」に新しい翻訳聖書はある、というのが、方針、大きな目標です。

新共同訳聖書も、カトリックとプロテスタント両教派での使用を前提とした共同の翻訳でした。しかしながら、「もちろん教会で使うけれども、一般の人たちも理解できる」ということを当初目標にし、その後、教会での使用を優先するという方針に変更しましたので、目標が曖昧になり、その結果、翻訳方針にも混乱が生じてしまったようなのです。

このことを反省しまして、新翻訳事業では、大きな目標を、初めからこの目標にいたしました。

「カトリックとプロテスタント教会の礼拝、礼典において教職者と信徒が、聖書を『信仰の書』として読むため」。

この目標については、ご批判もあろうかと思えます。これは「内向き」ではないか。教会の礼拝、

礼典にだけ目をやり、聖書を「信仰の書」として捉えるのは、教会の外への配慮がなさすぎるのではないか。

そのようなご批判もあろうかと思えます。しかし、新翻訳事業の目標が（このような）「教会の礼拝、礼典において、教職者と信徒が、聖書を『信仰の書』として読む」というものであっても、このことは、「聖書が一般の人々に読まれる」ということを排除するものではありません。いろいろな聖書の訳があつていい。岩波の訳もあつていいし、個人訳もあつていい。それぞれが排除しあうのではなく、異なる役割を持てばいいのではないかと考えます。「教会のことを考えるのは内向きだ、けしからん」ということで、すべてが一般の人たちの教養に仕える翻訳、学問・研究に仕える翻訳ばかりになってしまいますと、教会は困ります。教会のための聖書もなければいけない。いや、教会がもっとも聖書を読み、用いるのですから、日本聖書協会としては、まず、最も求めの多い、教会向けの聖書を、やはり、作らなければならない——これは当然だろうと思えます。何も、閉ざされているわけではない。開かれています。教会だけで通じるような用語は、もちろん、避けなければなりません。一般の人たちも読めるようにするのは当然です。しかし、礼拝、礼典で用いられることが主であり、「信仰の書」として読まれることを大きな目標にする必要があつたのです。

新共同訳と、新しい翻訳聖書では、方針に若干の差異がありますので、そのことが訳語を選ぶ際にも影響を与えてきます。新共同訳は、当初、聖書が一般の人たちに広まることを優先したようですから、「分かりやすさ」を主に追求した部分が残っていると思います。一般向きの翻訳ですと、やはり表現が親切なものになります。ときに、親切すぎることもあります。訳が説明的になるのです。

この表をご覧ください。分かりやすい例を集めました。これまでの日本語訳の訳語を比較したものです。

ヘブライ語で、ツェダカーは、文語訳、口語訳は「義」と訳してきたのですが、新共同訳では、「恵みの御業」となりました。新しい訳では、元に戻して「義」となるだろうと思えます。

ツァディークは、文語訳「義人」、口語訳「正しき者」、新共同訳「あなたに従う者」、新訳では、まだ決まっていないのですが、「義なる人」という案もあります。これは、しかし、採用されず、別の訳語が当てられそうです。「正しい人」あたりが妥当でしょうか。

ラーシャーは、文語訳「悪しきもの」、口語訳「悪しき者」、新共同訳「神に逆らう者」、新しい訳では「悪人」という案も出ましたが、口語訳にもどって「悪しき者」になる可能性が高いです。

ハーシードは、文語訳「聖徒」、口語訳「聖徒」、新共同訳「神の慈しみに生きる人」、新しい訳では、まだ検討中ですが、「信仰ある人」とか「忠実な人」という案が出ています。

ここで急いで申し添えたいことが2つあります。ひとつは、今回の翻訳事業では、これまでの邦語訳聖書の中で「目標」にかなう訳があるならば、古い訳に戻ることにはばからないということです。二つ目は、ひとつの原語に対してひとつの訳語でかならずしも統一しないということです。例えば、ハーシードを「信仰ある人」ないし「忠実な人」のどちらかに決めてしまつて固定する、例外も認めない——というようなことはしません。ゆるやかに統一するということで、訳語をどれに

しようか迷うくらいなら、最初の翻訳者から提案された訳語にすればいい、ということです。文脈上、ここはぜひ別の訳語を使う必要があるというのであれば、別の訳が認められるはずですが。

以上の訳語の例からも分かるように、新共同訳は説明的すぎる、という印象を受けます。説明的ということによって、次の3つの問題点が出てきます。

1) 訳語を説明的なものにしますと、一般の人たちには分かりやすくなると思いますが、礼拝、礼典で用いづらくなります。日本語としてのリズム、調子が悪くなります。

2) 先程、意味というのは、テキストと読者との出会いから生じてくる、と申しました。説明的な訳には、この出会いのチャンスをなくすという欠点があります。出会いを待たず、翻訳の段階で意味を限定して、親切にも提供してしまっています。ツェダカーは「恵みの業」という意味でも間違いではありませんが、しかし、もっと広い多彩な意味をもたらすはずなのです。その意味の広がり芽を摘んでいる。狭い意味で言葉を限定してしまっています。

3) これと似たことですが、説明的な表現は、意味は分かりやすいのですが、表現に面白味がない。先程の「あんたなんか、大嫌い」の例に戻れば、これは、「大好き」の意味だから、「大好き」と訳しておこうというようなものです。この場合の「大嫌い」は複雑な意味合いを含むわけで、大いに関心を持っているのに、「大嫌い」と表現するところに、セリフの面白さ、意味の深みが出て来るのです。これを説明してしまっただけでは、味気がないです。意味というものは読者自身がそれに出会わなければならないのです。

#### 「パン(レヘム、アルトス)」は「ご飯」か？

ここで、具体的な翻訳の作業をご紹介します。

まず、全体の概念図をご覧ください。

聖書の翻訳作業は、まずは翻訳チームから始まりました。翻訳チームは、原語担当翻訳者と日本語担当翻訳者が2人1組で構成します。原語担当者と日本語担当者が最初からチームを組むというのは、新共同訳のプロジェクトにはなかったことのようにです。このチームで、4稿まで進みます。まず、原語担当者が底本から翻訳をします。これが第1稿。次に、日本語担当者が、第1稿の訳を翻訳方針に沿って修正します。これが、第2稿。さらに、原語担当者と日本語担当者は、第2稿を共同で検討し、第3稿を作成します。

次に、該当する書を担当した翻訳者チームの2名、翻訳者兼編集委員2名、そして、聖書協会のスタッフが加わり、「翻訳者委員会」を構成します。翻訳者委員会は、第3稿を検討・改訂して第4稿を完成させます。この4稿というのは、翻訳者が翻訳方針に沿い、共同で訳文を完成させた最終案です。この時点で、翻訳者によるすべての作業は終了です。その後、翻訳者以外の人たちが訳文を朗読して同音異義語などを洗い出す朗読チェックが入って第5稿となります。

次に、「編集委員会」による検討が行われます。これが第6稿にむけての作業です。翻訳者のほかに、様々な分野の専門家、聖書神学、教義学、翻訳学、日本語、典礼、女性学等の専門家が編集委員会を構成し、専門的な見地から第5稿を検討して、訳文に問題がある場合などには改訂します。これが第6稿です。

本日は、皆様にパイロット版をお配りしていますが、これは第6稿の仮に印刷したものです。

第6稿のパイロット版を書ごとに作成して、外部モニターに配布し、第6稿の訳文に関してフィードバックをしていただく。編集委員会はこのフィードバックを受け、訳文を調整します。これが編集委員会による最終稿となります。これが第7稿。

次に序文や用語解説などを執筆し、聖書協会のスタッフによる調整を経て、最終調整となります。訳文は理事会に提出され承認を受けます。第8稿です。その後、印刷に向けて作業が開始するという具合です。

翻訳の全過程は、簡単に言えば、以上ようになります。

ところで、この概念図にあるのは、最低限の活動でして、翻訳に関わる者は、翻訳事業のあいだ、学び続けます。外部の講師による講演や、互いに発表もし合ったりもしました。また、合宿の際に、交わりの時を持ちます。このように、学びつつ、硬直しがちな頭を軟らかくします。耕すのはテキストだけではなく、私たちの頭も耕しながら進んできました。

翻訳事業に関わる者全体が参加する全体会議も、初めのころに行われました。その際、海外で長く聖書学、言語学を研究されてきた村岡崇光（たかみつ）先生のご講演を聞く機会がありました。そのご講演の中で、一つ、大事な問題提起をされましたので、ここで、そのことに簡単に触れておきたいと思います。

そのご講演の中で、村岡先生は、ふつう「パン」と訳されている言葉を、日本語にする場合は、「ご飯」と訳すべきではないか、という提案をされました。「パン」と訳されるのは、ヘブライ語ではレヘム、ギリシア語ではアルトスと言いますが、それは、確かに、イスラエルの人たちにとっては、日本人にとって「ご飯」に相当するような役割を持っています。生活の糧や、心の糧、生活や精神や人生を支える糧という、きわめて重要な意味合いを持っています。

村岡先生のご提案は確かに重要なことを示しています。「パン」では日本人には、あまり切実な感じがしない。「パン」が切れていても、あまり困らない。だから、日本人に対しては、「パン」より「ご飯」のほうが、原文の意味合いをよく伝えるのではないか。確かにそうです。皆様はどう思われますか。

しかしながら、もう少し慎重に考えてみなければなりません。意味は出会いによって生まれると申しました。一人の日本人がレヘム、アルトスという言葉を読む。言葉と読者が出会って「ご飯」という意味が発生する——これはいいでしょう。しかし、そこで発生した意味を訳語にしてしまうのは、いかがでしょうか。発生してきた意味を訳語にすると、言葉との出会いが今度は、また次の次元で起こることになります。今度は「ご飯」という訳語を日本人が読んで、そこで新たな意味が発生してきます。「ご飯」という言葉は日本人にはあまりに豊か過ぎて、「パン」の「訳語」にするにはふさわしくないように思われます。別の文化的な意味を産み出すのです。家庭とか、故郷とか、おふくろの味とか、味噌汁とか漬物とか、そういう、「パン」とは違う意味が発生してしまうのです。

意味は出会いによって生じてきます。しかし、その出会いの結果を訳にするのは、いかがでしょうか。個人訳ならそれでいいでしょう。個人訳なら、むしろ、良い訳になります。しかしながら、聖書が礼拝や礼典で使われるという目標を持ったこの翻訳事業ではどうでしょうか。訳は出会いを記述したり、その結果を発表したりするのではなく、出会いを演出するものです。答えを出してし

まっではいけないのです。

### 「人の子ら」か「アダムの子ら」か？

訳語を選ぶのは、難しいですけれども、なかなか興味深いことです。苦しいけれども、喜びもまたあります。

この講演の最後に、ひとつ、訳語の検討の例を、取り上げてみたいと思います。もうずいぶん以前のことになってしまいましたが、詩編の訳として興味深い訳が翻訳者委員会のほうに上がってきたことがありました。訳語検討の一例として、ご紹介したいと思います。これを皆さまも一緒に考えていただければ、幸いです。

詩編 90 編 3 節なのですが、新共同訳ですと、こうなっています。

あなたは人を塵に返し、  
「人の子よ、帰れ」と仰せになります。

この箇所の新しい訳が、翻訳者委員会に上がってきました。その訳は次のようでした。

「アダムの子らよ、帰れ」とあなたは言い  
人を塵に返らせる。

ここでは、新共同訳で神が「人の子よ」と呼びかけているのに対して、新しい訳では「アダムの子らよ」と呼びかけている点が大きく異なっています。

しかし、新翻訳事業では、「アダム」という言葉は、個人を指していることがはっきりしている場合以外は、一般的な意味なので、「人」と訳しましょうという合意がなされています。しかも、この訳は、第3稿の段階でしたので、それから、まだまだ第8稿まで、多くの方々の目をくぐりぬげなければなりません。ですから、最終的には「アダムの子らよ」ではなく、「人の子よ」という訳になると思われました。実際、今は第6稿あたりですが、「人の子らよ」に変わっています。

私個人としては、翻訳者委員会に上がってきたこの訳もいいのではないかと思います。その理由は3つあります。

この節は、新共同訳で2回「人」という訳が出てきます。ところが、この2つの原語は違います。「人を塵に返らせる」という部分は、エノーシュです。「人の子よ」という呼びかけの「人」は、アダムです。隣接する原語が違うのだから、訳は同じにしまわなくて、変えたほうがいいのではないかと、思います。2つ目の理由としては、「人」と訳すよりも、「アダム」にしたほうが原語に近い、というより原語と同じということがあります。そして、3つ目は、ここが大事なのですが、この箇所は創世記の3章19節、アダムが禁断の木の実を食べたので、神様からお叱りをうける、そのお叱りの言葉と関連しています。19節「お前は顔に汗を流してパンを得る／土に返るときまで。／お前がそこから取られた土に。／塵にすぎないお前は塵に返る。」——このことばと関連しています。聖書では聖書の他の箇所を思い起こさせることがとても重要です。聖書というのは、聖書の

中の他の書、他の箇所と連想、関連で網の目のようにネットワークが張られている世界とも言えます。ですから、詩編のこの箇所が創世記3章19節と関連していることを読者により印象付けるために、ここは、「アダム」と訳した方がいいようにも思います。

皆様はどう思われますか？

私たちは、翻訳の様々な過程で、このようなことをいろいろ考えながら、訳語を検討してきました。まだ訳語が決定しない言葉も少しあります。訳語検討のほんの一例ですが、ご紹介させていただきました。

#### IV. 最後に

##### まとめ

さて、創世記3章には、この引用のすぐあと23節に「土を耕す」という記事があります。「**主なる神は、彼をエデンの園から追い出し、彼に、自分がそこから取られた土を耕させることにされた**」。

耕す——今日の講演のテーゼとここで関連します。アダムに課せられた仕事——人類最初の仕事、それは土を耕すことでした。

わたしたちの聖書翻訳も耕すということです。私たちの翻訳の仕事は、創造物語のアダムの仕事に重なります。

「耕す」と訳されている言葉（アーバド）は、直訳すれば「仕える」です。「しもべ」と同じ語根です。アダムの仕事、人類最初の仕事は、「土に仕える」ということでした。

私たちの、聖書を耕す仕事は、人類最初の仕事につながります。聖書の翻訳——それは、聖書に仕える、ということにほかなりません。

今回の聖書翻訳事業はもう少し続きます。大きな山は越えたように思います。しかし、最後まで油断することなく、神様に導かれながら、完成に向かって進んでいかなければなりません。

この事業の完成を皆様のお祈りの内に加えていただければ幸いです。

ご清聴ありがとうございました。

※以上、2014年5月15日に行われた日本聖書協会講演（於・TKP 大手町コンファレンスセンター）と  
ほぼ同じ

追記：

（2018年に完全原稿がすべて集まる予定。出版は2019の予定）